コミュニティ・ケアとは何か

別府大学文学部人間関係学科
教授　秋田　清

1 はじめに

ネットワーク開設に際して、このネットワークで何を目指しているかということについて、発案者のひとりとして、問題提起をさせていただきます。

人間関係学科は、2000年度開設以来、地域福祉のあり方を考え、活動する場として運営をしてきました。当時もすでに「地域福祉」という言葉は語られていましたし、その後、「コミュニティ・ケア」ということばが盛んに使われ、グループ・ホームなどの開設が行われてきました。しかし、ことばが流行っているほどには、「コミュニティ・ケア」が、内に孕んでいる問題について考えられているとは思えません。「コミュニティ」とは何か、「地域」はどうあるべきかについてはほとんど問われていないのが現状です。

かつて、人里はなれたところに、姥捨て山のごとく立てられた老人ホームが、街中に移されたり、収容所のように大規模な施設が少人数のものになれば、それで良いわけではありません。障碍者が、コミュニティの一員として生活ができるかどうかが問題です。そのとき、障碍者が参加するに値する地域であるかどうか、その地域で生活をする人々が、障碍者も含めて、喜びを感じて生きていけるかどうかが問題です。

「喜びを感じて生きていけるかどうか」、「幸せかどうか」と、ことばで問題を立てることは簡単ですが、それが、実際にどういうことかというのは、なかなか難しいことで、一義的に語ることは困難です。人間とは何か、如何に生きるべきかという回答のない問いを問い続けることと不可分に結びついているからです。でも、このことについて少し考えてみたいと思います。

2 物象化された世界

現代の社会生活の基本的な在り方について考えることから始めたいと思います。皆さんもライブ・ドアの事件は関心を持って見ておられたと思います。直接的な逮捕容疑が「粉飾決算」だったというのも現代社会を象徴するのにふさわしいことでした。世の中マガイモノだらけで、耐震偽装マンションの建設もそうですが、まっとうなものなどほとんどない状況です。「プロの崩壊」という言葉も語られましたが、専門家としての誇りとそれに基づく仕事はなくなり、「プライド」という言葉が「見栄」という意味しか持たなくなってしまいました。

「日本放送の乗っ取り」では、「会社は誰のものか」という問題も提起されました。法律的にいえば、株主のものであるのは明らかなのですから、「誰のものか」という問いを出して、そこで働いている人のものなどという中途半端な答えなどでは何の答えにもなってないことは明らかです。そんな答えを出すくらいなら、最初から「誰のものか」などという問題など出さなければいいのにと私は思います。「会社は誰のものか」という問題を出すのだったら、「会社はみんなのもの」という答えを出すべきです。

しかし、そのように答えた時、その答えの空虚

さに気づきます。そう言い切れる現実的な根拠がないことに気づくからです。会社はみんなのものであるべきです。しかし「みんなのもの」を支える「みんな」は存在しません。我々は「会社は株主のもの」という世界に慣れ親しみ、その中で生活をしています。お金がすべての世の中で生きているのです。

ホリエモンは、「お金で買えないものはない」と言って、それを信念に活動し、牢獄に入れられました。持ち上げられたり、蹴落とされたり、外から見ていると大変ですが、自分のやりたい様にやって、彼はかれで幸せだったのかもしれません。普通には、お金では買えないものがある、人の心はお金では買えない、皆さんのように若い人は、「愛はお金では買えない」と言いたいところかと思います。

でも、たとえば、マルクスは『経・哲草稿』の中で、シェークスピア『アテネのダイモン』から次のような一節を引用しています。

> こいつ（お金）はまた
> 老いぼれの後家のところへ求婚者を連れて行く。
> 毒の脳が流れる傷で
> 嫌がられて病院を追い出された女を、
> 爽やかな五月の緑のように若返らせるのもこいつだ。
> のろわれた金属め、
> お前は人間を誰でもたらしこみ
> 諸国の人民をだます娼婦だ。

金貨やお札に罪があるわけではありません。金貨は金属の塊ですし、お札は紙の印刷物です。1万円札は、20円あまりの印刷物にすぎません。これに魅力や支配力を持たせているのは人間の社会生活のあり方です。

親が娘に「知らない人についていってはいけません」というのは誘拐されないための注意ですが、「死なない人について行ってはいけません」というのは遺産相続のための合理的方策です。これが受けるのは、語呂合わせの面白さだけではありません。なにほどかの「真実」を含んでいるからです。

封建的な身分社会から、自由と平等を原則として生まれた近代社会は、「労働全収権」（自分で稼いだものは自分のもの）を基礎にした金勘定の世界です。お金を媒介にして、人々の欲求がかなえられる世界です。お金を渇望するのは、それが、人間が持っている欲望をかなえてくれるからです。バレンタインデーのチョコレートも、ホワイトデーのお返しも、お金がないと買えません。老人ホームを作るのにもお金がかかります。建設会社はただでは建物を建ててくれませんし、あなた方もただで働いたりはしません。経営者は儲けなければ、少なくとも損をしないのでなければ継続してはいけません。

すべてのことが、お金を媒介にして行われると、人とひととの人格的、直接的な関係、人々の思いは、間接的で、媒介されなければ伝わらないものになって、ゆがんでいきます。お金は手段だったのに、あたかもそれが目的であるかのような錯覚が生まれます。すべてのものがお金の額に換算され、お金の額と額との比較を通じて関係付けられるようになります。お金が崇拝され、金勘定の世界が完成します。でも、そのことによって、われわれは、身分や信仰、民族によって差別されることなく、直接的な人格関係にさらされることなく、お金さえ持っていれば、なんでも手に入れることができるようになり、それを通して、自分と他人とを関係付けることができるようになりました。世界は、金勘定の世界としてひとつのものになったわけです。

近代社会に生きる人々の普遍性への欲求は、この貨幣が持つ普遍性によるものともいえますし、人が持つ普遍性への欲求が金勘定の世界として実現したともいえます。類として存在している個々の人間が持つ全体に対する支配欲の現れということもできますし、遺伝子が持つ自己増殖欲の現れということも可能です。もちろん遺伝子の欲求が、金勘定の世界をつくりあげたわけではありません。これらの関連を説明するためには、幾重にも重な

った媒介が必要です。

ともあれ、ホリエモンは現代を生きる人間の象徴です。多かれ少なかれすべての人はホリエモンになっています。そうした人間の願望が、彼を持ち上げ、後ろめたさが、彼を蹴落としたわけです。

この金勘定の社会はすべてのものを量化して関係をつける社会でもあります。アンケートをとって、統計処理をして、卒論をごまかした人も多いと思いますが、統計は人間を数量化し、行政処置や支配をするための手段でしかありません。個人ではなく、人間を「マス」として捉えるものです。量が多いことが真実という錯覚もここから生まれます。多数決が民主主義のルールとは良く言ったものです。民主主義というのは支配の一形態なのですから。

ただ、ここで、「支配＝悪」と単純に決めつけないでください。というのは、支配とは、その時そのときの状況における社会的統合の原理でもあるからです。人々が持つさまざまな欲求、諸個人の内的な矛盾が、矛盾を孕んだまま外的な姿をとって現れているともいえます。諸個人のさまざまの欲求を、「１人１票」という平等原則で量に還元し、折り合いをつけているともいえるからです。その意味で、支配とは、諸個人に内的な矛盾、諸個人間の矛盾にさしあたりの解決を与えているものともいえるからです。

しかし、それで満足できないから、そこに非人間的なものを見るから、「一人の人間の命は地球より重い」と言ってみたくなるわけです。これは数量的には成立しません。「ひとりはみんなのために、みんなは一人のために」ということばは美しいかもしれませんが、それを口にするのが気恥ずかしいのは「私は私のために、みんなは私のために」とどこかでわれわれは思っているからです。

すべてのかかわり、人間関係を数量化するのは、社会全体を諸個人の上に置き、その社会の上に自分を置き、自分以外の人々を自分の生活の手段として捉えるからです。操作対象として捉えるからです。せいぜい対処療法として捉えるからです。われわれが時に、「一人の人間の命は地球より重い」と言ってみたくなるのは、われわれ一人一人がこの嫌な金勘定の世界を支えているからです。いやな世の中、でもその世界でわれわれは生きているわけです。いやな世界をいやだと言う当の人々が

支えているのです。かつて、マルクスやニーチェが、ハイデガーやフーコーが共通に抱えた問題は、この袋小路をどう切り抜けるかという問題でした。

3 「ケア」という犯罪

人間関係学科も臨床心理士協会の認定を受けた修士課程を作り、この3月に最初の修士が生まれます。人間関係学科開設の準備過程から、私は、自分が食うために、社会的にはひとつの犯罪行為をしているのではないかという思いがいつもありましたし、修士論文の発表会で、報告を聞いていて、その思いはますます強くなりました。

こんなたいした努力もしない、考えてもいない人間たちが、「心の専門家」などと称して（他の人は「心の素人」なの？）、世の中に出て行くのかと思うと寒気がします。「あなたが病気になったとき、あなたと同じ程度の努力しかしていない医者に、あなたは掛かれますか」と訊いてみたい気がします。あるいは、カウンセラーなどというものは所詮その程度のものでしかないのかもしれません。「専門的知識と技能」は、こけおどしの飾りで、社会生活をしている極普通の人ならば誰でも、カウンセリングはできるのかもしれませんし、事実、臨床心理士などいなかったときにも、人の話を聞いて慰めたり、元気づけたりすることは、誰でもやっていたわけです。逆に言えば、臨床心理士などという資格を作ることによって、普通の人たちが行ってきたお互いに慰めたり励ましたりする人と人との極普通の関係を奪ってしまったとも言えます。何か起こると、責任を取りたくない教師や公務員が、対策を講じたというアリバイ証明のために、「臨床心理士を派遣した」と言い張ったりするようになっています。

そんな、普通の人が誰でもやっていることとは違うと言える、どんな知識と技能を持っているといえるでしょうか。皆さんたちの卒論も大同小異だったと思いますが、アンケートをとって統計処理をすれば、それで何かが明らかになっているとか、人間のことがわかるかのような錯覚をして、「考察」などという、ことばだけの飾りをつけて済ます姿勢には怒りさえ覚えます。

それで得意になっている限りは、単なる権力の走狗でしかありません。自分自身を支配の道具にしているにすぎません。「ともに悩む」のは結構。だが何をどのように悩むかが問題です。

現代はストレス社会で、ストレスで病気になる人が増えている。だから、ストレスを癒すことが必要であるといわれれば、そこには一見ごまかしはないかのように思えます。それが社会的に要請されているといわれれば、そこにうそはありません。だが、それを要請している社会は、ストレスを生み出している社会そのものです。なんのことはない、このストレスを生み出す、問題を抱えた社会から、せっかく離脱した人間を再び社会の秩序に戻す役割をしているにすぎません。それはひとつの犯罪行為です。

不登校や登校拒否をした児童生徒を、そうした児童生徒を生み出した学校に戻してこと足れりとするのは、同様にひとつの犯罪行為です。かつて、長い間登校拒否児のカウンセリングを行っていた精神科医の渡辺位は、治さなければならないのは、登校拒否児ではなく、それを生み出した学校や教師、それに惑わされた親たちだと言っていました。現在の学校制度の下で、登校拒否をしない児童生徒は、果たして人間として正常なのか、という問題がここでは立っているのです。

こうした問題意識を持った精神科医や臨床心理士は、社会改革に向かおうとしています。こうした人たちは「社会派」と呼ばれていますが、ひとつのありうべき存在です。かつて、フーコーが提起したことも、このような問題と関係があります。その時代、その地域や国家の秩序からはみ出した人間を精神病者として、排除することによって、秩序を維持しているに過ぎないという提起は、常に心に留め置く必要があります。これは近代社会が抱えた病理です。近代社会は、普遍性の名の下に、すべてを量化して、その統合を図りました。自由と平等とは、実はそこで生きる人々が、不自由と不平等から、決してのがれ得ない世界のあり方以外のものではなかったわけです。

ただ、言うまでもなく、これで、問題が片付くわけではありません。現に、「精神障碍者」は存在していますし、彼らの多くは、その状態に喜びを感じているわけでも、満足しているわけでもありません。社会が理想的なものになるまで、待っていなさいと言うわけにも行きません。

病気で苦しんでいる人がいるのも事実ですが、治して社会復帰させることは、病気を生み出している社会の秩序を維持することでしかないわけです。この矛盾をどのように捉えればよいかが問題です。

死に行く老人のケアをしているから、身体障害者の世話をしているから、そうした問題は存在しないというのは、マヤカシです。それが、産業廃棄物処理やリサイクル以上のものだと断言できるほど、まっとうな対応ができているとは思えません。

4 コミュニティ・ケアとは何か

では、どのように問題を立てればよいか。

不登校児が戻る学校は、元の学校ではありえません。精神病者が「復帰する」社会は元の社会ではありえません。フリー・スクールや就労支援センターなどは、ことの核心を理解していないとはいえ、さしあたりの経験主義的「解決」策です。バリア・フリー、ノーマライゼーション、エンパワーメントなどの思想は、その限り革新的です。だが、それはまた、秩序維持のための補完物でもあります。ただ、人は全世界に絶望しても、一人の信頼できる人との関係の中で、新たな世界の可能性、希望を見出すことができます。そこから、新たな物語、自己を中心にした世界把握が始まります。

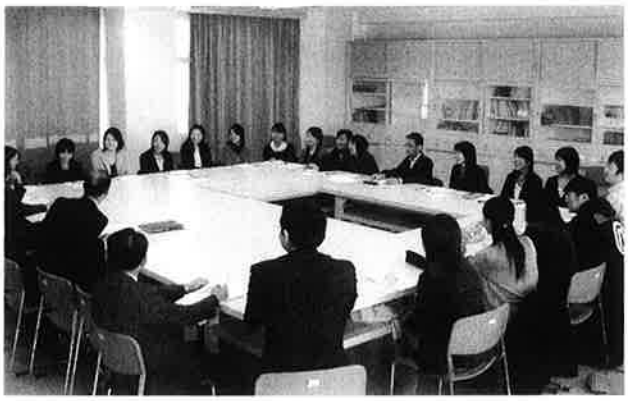
教育が児童生徒から学ぶことであることを忘れ、彼らに社会秩序を押し付けたり、障碍者を社会に適合させようとしている限りは、問題は解決には向かいません。かつて、糸賀一雄は次のように述べていました。「一般論的に言えば、その（文明社会―引用者）なかにありながら、精神薄弱というハンディキャップを持ったその人格をとおして、この世の中に、逆に、はたらきかけていこうとい

う主体性を育てることである。それは彼らの恵まれない現状に対して、世の光をあてるということであるよりも、そのような愛情と理解を、社会の中で育てながら、さらにひとりひとりの精神薄弱児たちを、世の光にまで育てあげることである」（糸賀一雄『福祉の思想』NHKブックス、1968年。pp.52-53）。

精神病者やクライアントの治療やカウンセリングとは、彼らを生み出した地域や社会、人間関係の改革に、共に向かうことです。その過程にしか彼らの「治療」は存在しません。そうしたものとして地域を捉えること、「地域福祉」や「コミュニティ・ケア」の核心はここにあります。言うまでもなく、ここで「地域を捉える」というのは、単に理論的な、観念の上でのことではありません。「捉える」とは、そこにある矛盾を現実的に解決するという実践的な行為のことです。

ただ、ここまでは常識です。何があるべき地域なのか、それがあらかじめわかっている訳ではないということの中にこそ、問題の核心があります。人によって、時代によって、地域によって、描かれる夢や希望や理想はさまざまです。その時点その時点で絶えず人間の欲求は変わっていきます。より良いものが実現したかに見えても、絶えず新たな問題が生まれてきます。あるいは、「真に人間的なもの」が、純粋培養で生まれるわけではありません。生まれてくるものは絶えず、妥協の産物です。絶えず何がより人間的なものかを問いながら、進んで行く以外にありません。その意味で、人間の歴史は壮大な「錯誤の歴史」です。「神の試練」とはこのことを指します。ひとつの政策や運動は、成功することによって、新たな問題を生み出します。われわれは、妥協において前進する道を学ばなければなりません。

人間関係学科が、創設以来、「地域の中の大学」としてその存在意義を問うてきたのも、カリキュラムをコースの枠にとらわれずに選択できるような編成にしたのも、このことと関係があります。専門的な知識や技能を身につけることは大事です。でもそれ以上に、何よりも人間を総体として捉えること、人類史の中で現代社会と人間について捉えてほしいと考えたからです。来年度（18年度）から開講する「人間関係学原論」は、哲学史の展開を軸に、こうした人類史の中での現代の問題を



直接取り上げたいと思っております。

この点に関しては、教員自身にも、問題があります。ともすれば自分の専門領域に安住しがちです。教員の研究会も2年続いて、外部の方で参加したいという申し出もあってはいますが、内容的にはまだ堵についたばかりです。卒論や修論を読んでいると、このお粗末さは、学生の限界ではなく、教員の限界だと思えてきます。

今回開設した「卒業生ネットワーク」は、こうした問題関心をより発展させるために、卒業生、学生、専任教員、非常勤講師、地域の福祉関係施設などで働く人々が、ともに地域福祉（地域で生きる人々のよりよい生活を目指した運動）に、より積極的に取り組むために有効性を発揮できるのではないかと考えております。

5 何が問題か

もう少し、具体的に考えてみます。

昔、「病気を治すのではなく、病人を治す」とか「全人医療」とか、「医者と患者が対等の立場で」とか、あるいは「病気を治すのは病人自身であり、病人の主体性を尊重して」などという言葉が流行りました。それ以前の対応の反省としては意味があります。

しかし、「病気も治せないものが、どうして病人を治せるのか」ということばも真実です。また、「病人や利用者の主体性の尊重」が責任逃れの、逃げ口上以上のものになっているでしょうか？

最近、社会学や心理学の分野で、「量的調査から、質的調査へ」などが語られていますが、それが、業績稼ぎのためにやらざるをえない調査を、どれだけうまくやるか、ということに終わっている限り、「目くそ鼻くそを笑う」の類です。調査が調査

対象者にとっていかなる意味を持っているか。彼らの生活の改善にどれくらい役に立っているか抜きの反省は、単なる独りよがりです。

ついでながら、卒論や修論で、あなた方が、権威付けや飾りのためにやった先行研究のサーベイは、先行者の冒涜以外のものではありません。良くて、剽窃です。先行者が言おうとしていえなかったこと、明らかにしようとして、なしえなかった問題を引き受けること、彼らの悩みを引き受けることこそが問題です（悩みのないものは、単純に無視すればよいだけです）。

「全人医療」の問題に戻ります。

福祉関係従事者の間で使われるジャーゴン（専門用語、あいまいなことば、戯言）で最近気になるものに、「患者様」、「元気をもらう」、「声掛をする」などがあります。「元の気」をどうして他人からもらえるのかわかりませんが（元の気はひととの関係の中で自ら取り戻すものです）、流行語を作り、それを使うことで、自分もいっぱしの専門家であるかのようにふるまい、良い気になっているようにしか思えません。「患者様」も同様です。「患者さん」で怒る患者がいたのでしょうか。「お客様」と言うのだから、「患者様」と言ってもかまわないなどと言われると、「お客様は神様」ということばを思い出します。お客様が神様であるのは、お金を持ってくるからなのですから。人の良い状態、あるいは普通の状態以外のことで、「さま」をつけるのは不自然です。強盗様とか詐欺師様とかといわないのと同様です。不登校児様とか障碍者様といわないのと同様です。病気をしている人をひととして尊重するからといって、その人の病気の状態を尊敬するのは変です。「さま」をつけてあたかも相手を尊重しているかのような顔をして、ことばだけで済ませているだけの話です。それは患者に対する侮辱です。

なぜ「声をかける」のではなく「声掛をする」のでしょうか。自分の祖父母に「声掛」をしたりはしません。祖父母に声をかけるのは、孫として、あるいは家族としての気使いです。だが、「声掛」は、プロとしてのマニュアルに基づいたものです。そこでは「声掛」が、治療やケアにおける、専門的知識と技術にもとづいた意味があるはずです。そのことに思いを致すことなく、ことばを省略しているだけなら、単なるマヤカシです。

いずれにしろ、ことばが省略され、マニュアル化されることを通してなおざりになり、やればいいんでしょうというようなものになってはいないでしょうか。せいぜい生きているか死んでいるかの確認くらいに終わっていないでしょうか。返事からどれくらいのことを読み取っているでしょうか。私の経験からすると、声掛をして、返事が返ってきたら、生返事をして終わっているように思えます。それだったら、素人の声をかける行為の方がはるかにマシです。少なくとも相手を元気づけることくらいは、あるいは寂しさを紛らわすことくらいはできます。声をかけているにもかかわらず、声をかける意味や関係が存在しなければ、相手は、意味不明の中で狂うか、ボケをいっそう進ませるしかありません。私だったら、近くにあるものを投げつけます（そして、追い出されたりして ― 野次）。「声掛」は、相手をケアの対象として、自分が賃金をもらうための手段としてしか見ていない行為であるように私には思えます。

それはちょうど、カウンセラーが「共感」や「受容」を語るのにも似ています。クライアントとは、有機体として別組織の存在でしかないカウンセラーが、クライアントの悩みを受容できる根拠が考えられていないからです。その根拠を、ハイデガーは「世界-内-存在」と表現しました。マルクスは「人間は社会的諸関係の総体である」と言います。そうした根拠をつかまない限り、それは、受け入れる振りをしたらうまくいったという経験談以上のものではありません。「共感」や「受容」がいけないといっているわけではありません。ロジャーズがそれを会得したのは、彼にとっては意味のあることです。しかし、それを口真似しているのは単なる間抜けです。カウンセラーが第三者面をして、あるいは自分には何も問題がないかのような顔をして、クライアントに対峙している限りは、決して悩みを共有したりはできません。胡散臭いだけです。

6 おわりに

木村敏の言う「あいだ間」とは、患者と医者との間に生まれる新たな世界です。それは「異常」を生み出した世界に立ち向かう根拠です。そこから世界を再編する支点でもあります。特定の「間」

は無数の「間」のひとつにすぎません。その限り「世界を再編すること」など不可能に思えますが、逆です。無数の「間」のひとつであるがゆえに、それが可能なのです。

精神病者とは、世界と、そして自己の存在の有り様と闘っている人のことです。世界とは人間関係の総体です。それは、人間が人間という病を生きている場でもあります。人は所詮、世界の中で、自己という病を生きています。

精神病者の言動は、しばしばわれわれには意味不明です。ことばの意味するものが、ずれています。一つひとつの文の意味は理解できても、何か奇妙です（もっとも、あなた方の卒論の文章に比べれば、私には理解しやすいのですが）。現に存在するものを普通のことばで表現しているとは思えないものです。彼らには、現実も、ことばもわれわれとは違った意味を持っています。「たとえ話」や「連想」、「比喩」や「隠喩」であることがしばしばです。ことばに込められた意味が違うのです。

ブランケンブルクが症例として取り上げた、アンネ・ラウの言う「自明性の喪失」とは、現に存在する世界を「自明なもの」として捉えようとするけなげな試みにおいて発せられたことばです。だが、その「ずれ」は現実が生み出したものです。彼らは別の世界を求めています。それは、現に存在する世界、人の在りよう、人とひととの関係の在りように対する怒りであり、異議申し立てであります。少なくとも、切掛けは、彼らにおいてもそうですし、われわれがそのように捉えることも可能です。困難は、その怒りや異議申し立てが、彼らにおいてはともかく、すべての人にとって、常に正当であるとはいえないことにあります。

かつて、1960年代後半、フランスの５月革命とともに、世界を揺るがした、日本における学生や青年労働者の運動（全共闘運動）の中で、「自己否定」という言葉が流行りました。膨大な数の自殺者が出ても不思議ではないかのような感じですが、そうではありません。この「自己否定」ということばで彼らが表現したのは、この世界の中で生き、この世界を支えている自己を否定することを通して、新たな自己と世界を創ろうとしたわけです。

「仏陀のことば」に「怒りが全身に回った比丘は、この世とかの世をともに捨てる、あたかも蛇が古い殻を脱ぎ捨てるようなものである」というのがあります。この世もかの世も現世にあります。喜びも悲しみも、苦も楽も、天国も地獄も現世にあります。それは世界と自己のありようです。その一方を選択するのではありません。その総体を廃棄する以外に、存在者は存在しようがありません。この廃棄する行為を狂気と言います。

古い世界を抜け出し、別の世界を知っている人間だけが、この世界を作りかえることができます。だが、こうした行為は、無数の、極普通の人間が、日々行っていることでもあります。あるいは、無意識的にしろ、試みていることでもあります。思想とは、こうした自己を中心に世界を作り変えようとする意識的行為以外のものではありません。ニーチェのいう「超人」とは、人を超えた、人ではない人ではありません。その魂を、現に存在する世界から、抜けださせた人間のことです。精神病者とは、この抜け出させた魂と肉体とが乖離した「存在者」です。また、そこに、われわれは極普通の人間たちの存在のあり方の核心をみることができます。

人は、より良い生活、より良い生き方を求めて生きています。あるいは自由を求めて生きています。肉体がなく、魂だけで存在できれば、すべてのことが可能だと言うことも出来ますが、肉体を持たなければ、何もできないとも言えます。その狭間で、われわれは苦しんでいます。心のもち方、世界の解釈では済まないところに、困難があります。この困難から逃れ、己単独での「生きやすさ」を求めても、「ヒト」が人間として存在している限り、それは実現しません。「狂っている」と言われるだけです。あるいは「世捨て人」と言われるだけです。所詮、十全にはかなわない「夢」あるいは「希望」を求めて、現実に立ち向かうことの中にこそ、人が生きる意味があります。患者やクライアントが抱えている問題の具体的・現実的解決こそが問題なのです。

その意味で、クライアントとの間に生まれる特定の「間」に賭ける覚悟のある者だけがカウンセラーやケア・ワーカーに成ることができます。無数の「間」総体の再編、コミュニティ・ケアとはこれ以外のことを意味しません。